

障害者スポーツと人生

—障害者水泳選手へのインタビューの記録—

阿部智恵子 (徳島大学大学院)

1999年8月10日

瀬川博彦さん(仮名)インタビュー

X県内のファミリーレストランにて実施
インタビュアー 阿部智恵子(徳島大学大学院)

=プロフィール=

48歳

21歳の時、建設現場での事故で右足首の関節より切断(神戸にて)

T市身体障害者連合会理事

市の連合会の体育部長

平成10年C級水泳指導員講習を受け合格する。

家族(妻、子供二人)

X県出身

身体障害者水泳クラブ「シーホースクラブ」(仮名)に入会している。

妻も身体障害者水泳クラブ「シーホースクラブ」に入会している。

自営で仏壇の彫刻をしている。(障害を持ってから習う)

平成10年日本身体障害者水泳選手権大会に出場する。

[]内は筆者の補注

小さい時からの水泳との関わり

子供の時は、泳ぐというよりは、魚を釣ったりする程度でした。

成人になってからは、泳いでいなかったです。

障害の原因について

S市の建設現場で高層マンションの工事用の運搬(エレベーター)の歯車に挟まれて右足の甲を挫滅しました。それで、足首より切断しました。

20歳よりS市に働きに来て、21歳で事故にあいました。

けがをきっかけとして昭和51年故郷へ帰ってきました。

けがをするまでのスポーツ歴

会社でもなにもスポーツをしていませんでした。

20歳まで野球クラブで(3年位)草野球などをしていました。

「シーホースクラブ」との関わりについて

N市の身体障害者スポーツ大会がきっかけで「シーホースクラブ」を作りました。

平成5年位と思います。

それ以前より、障害者水泳クラブで女性たちが数人で泳いでいました。それに私たちが

加わって、名義変更をして「シーホースクラブ」となりました。

入会の条件は・市内在住であること

- ・障害者であること（程度、種類は問わない。）
- ・18歳以上
- ・内部障害は除かれています。

私自身は「水泳をしてみませんか」と声をかけられ「します」といって入会しました。

障害後の水泳との関わりについて

けがの後、泳いでみると最初はほとんどクロールも平泳ぎもできなかったです。プールに入って、泳いでみて、『こんなに泳げなかったんだなあ』と思いました。

指導は水泳連盟のGコーチがしてくれました。他にボランティアの学生とか…。

泳ぎをしている人の動機はさまざまです。自分は「泳ぎませんか？」と声をかけてくれたので、泳ごうと思いました。

クラス分けについて

地方大会では、42クラスくらいあります。[平成10年までは日本身体障害者水泳連盟のクラス分けは42種目であったことを指すと思われる。なお現在は26種類に減少している。(松木直幸氏のインタビューの注2を参照)]

肢体が5項目、上肢(手)が4項目、聴覚視覚が3項目など全部でひっくるめて42～43あります。

全国大会では狭まります。上肢10あるものが、5つ位になります。人数が多いし、クラスが多くなり過ぎるので…。

クラス分けについての不満などはありません。本部が決めてくるので…。

うちのメンバーの中で、なかなか平泳ぎができない人がいます。足の甲で蹴ってしまうのでキックになります。泳法違反になります。

瀬川さんの大会歴について

中四国大会(地方大会)が年1回開かれます。今年は広島で7月11日にありました。

広島で標準記録を破ったが、仙台は[1999年度の日本選手権大会の開催場所]遠いので、行きません。

日本選手権大会が年1回あります。それに出るため、地方大会があつて、(九州、名古屋、広島、関東、中部地方)これには、誰でも出られます。

標準記録を達成して日本選手権大会があつて次にジャパン・パラリンピックがあります。

自分は、習い初めて1年位で名古屋の30回大会に出ました。平成6年頃に、クロールで3位でした。平成10年にも大阪の日本選手権に出ました。個人メドレー、背泳ぎ、どちらかでメダルをもらいました。記録は今覚えていませんが…。

やさしいのは、平泳ぎですが、自分はバタフライが難しかったです。

今は泳ぎをしていて、特に不自由な面はありません。

泳ぎを始めた動機について

泳ぎをしている人の動機はさまざまです。自分は「泳ぎませんか？」と声をかけてくれたので、泳ごうと思いました。

水泳の一番よいところについて

県外に出て、友達ができるところが楽しみです。全国、中四国、広島、高松などへ行きました。1年後にまた会えるという楽しみがあります。

自分は、そのまま（健康）で来たら、水泳もなにも、他にスポーツはしていなかったと思います。けがをしてからの方がスポーツに触れられたのではないかと思います。小さい大会でも、どこまででも行けるし…。メンバーも生き生きしています。明るい。交流もできます。障害者になって泳ぎはじめたことが、自分にとって大きいです。水泳は、水の中の、全身運動になります。

水泳のライバルについて

広島に一人います。その人は、大腿部切断（片足）をしている人です。クラスは違いますが一緒に泳ぎます。個人メドレーで自分の方が毎年負けますが、励みとなっています。

ライバルがあれば、普段の練習でも身が入ってできます。年1回ライバルと会う楽しみがあります。その人とは、普段はハガキを出すくらいです。

家族について

妻も3年前から水泳を始め、一緒に泳いでいます。平成12年に富山県で全国身体障害者スポーツ大会が行われるのでそれに出場したいと思い妻と一緒に一生懸命泳いで練習しています。

子供たちは、「一生懸命がんばりなよ」と言ってくれます。子供は、女の子ばかりで24歳と23歳です。子供は水泳をしていません。あまり応援には来ませんが、今年、5月にK町で水泳大会があった時、下の子が応援に来てくれてビデオを撮ってくれました。

普段の練習について

以前は公共施設で毎週火曜日（18時～19時）に練習していましたが、今は、工事中なので、泳ぐところがないので、お願いしてS施設で泳いでいます。

9月か10月には、直るでしょう。S施設では週1回、木曜日の（19時～20時）に障害者だけの貸し切りです。5コースあります。

公共施設では5コースありますが、貸し切りではなくて、1コースしか貸してくれないので泳げない人は、コースの中で泳ぎ、他の人は健常者と一緒に泳ぎます。

本当は、貸しきりの方がいいです。

Z町のプールへ行っている人もいます。温水プールでチューリップ公園の横にあり、健常者と一緒に泳いでいます。

職業について

自営で、仏壇関係の彫刻をしています。障害を持ってから習いました。

スポーツや水泳をする上で気をつけていること

事故とか、けがですね。あつてはならないことですが、足をすべらせてこけるとか。身体が不自由なので [気をつけています]。

事故後のリハビリについて

足首切断だけなので自分はリハビリをしていません。

一番リハビリをしている人はFさんという人です。Fさんは「シーホースクラブ」に入った時には、プールで上へ上がる時にも上がれなかったくらいでしたが今は全然違います。自分が、身体を作ってきたからすごく上達しました。

スポーツする前後で、変わったことについて

仕事の面をきちっとしてから、練習に行くようになりました。計画的になりました。日常生活に張りや目的、目標ができました。

これからの夢・抱負について

障害者がもっとスポーツに関心を持ってほしいと思います。引込み思案であったり、後ろむきであると思うことがあります。一般の人の理解も悪いように思います。もっと近寄ってほしいと思います。

もっともっと水泳人口を増やしたいです。50名位にしたいです。人数が増えても、県の方の助成金は一定なのですが…。

障害者の会の時に、障害者の方に会うと水泳を勧めています。しかし、反応は、いまひとつです。はだかになるところや、人に見られるのを嫌がる場所があります。いろいろな人に言ったけれど、入らない人もいます。入ってくれた人もいますが…。1回入ったら、やめたりする人は少ないです。

今後はスキーをしてみたいと思っています。今までは全然したことはありません。他のこともしてみたいと思います。

私自身は、もっと早くスポーツをしていればよかったと思います。

今、一番ほしいものについて

温水プールが一番ほしいです。公認のプールが市内にできたらよいと思います。

広島は温水プールが福祉センターの中にあり、いつでも使えます。時間帯で一般公開もしているようです。

県のT町の建て替えは、プールを作るのも、敷地の問題があります。

一昨年、あるファミリーレストランの部屋でA市長にコーチ他30名で温水プールを作ってほしいと陳情したが、答えは芳しくなく、実現しませんでした。

スポーツをする上で自分に影響を与えた人について

人で言えばGコーチです。「シーホースクラブ」がGコーチにお願いして教えに来てもらっています。その他には、会長さんやMさんです。Mさんは、今年定年退職しました。

Mさんは学生の時に爆発事故で両手を切断したそうです。

今後の水泳との関わりについて

泳ぐことができるまで続けるつもりです。関係が切れないです。水泳ができなくなると思う時は自分のからだ泳ぎに適していないとわかると思うのですよ。そこまでは、絶対続けてみたいです。75、6歳まで泳いでいるかもしれません。

スポーツを通じて人に伝えたいことについて

障害者スポーツをする人が増えてほしいです。視野が広がり、友達もできるからです。昔と比べると、障害者スポーツは広がってきたと思います。

今後の予定について

今年とはとくにありません。

来年は名古屋で中部大会があり、それに出てみようかなと思っています。来年6月ぐらいだと思います。

来年中四国大会が高知であります。たぶん7月か8月位です。

目標としては、個人メドレーで1分50秒の壁を破りたいと思っています。今は1分52～53秒の間です。全国には1分30秒で泳ぐ人もいます。

水泳と私について

去年1年間、5月からGコーチの紹介でC級の水泳の指導員の講習を受けました。

検定が昨年11月3日にあり、合格させていただきました。あとNHKの通信教育で教材7科目(C級の指導員)中2科目不合格。追試験を受けて、今年になって受かりました。1年間みっちり勉強しました。認定証が出たら、名刺に入れようと思っています。今、市の身体障害者連合会の体育部長をしています。

指導員が少ないので、十分コーチできないためメンバーを見てあげたいです。

A級は世界に出る人のコーチをする人、B級は中学生、高校生を指導する人、C級は初めての人を指導する人です。

日本水泳連盟の検定を水泳で4種類泳げれる人なら受けられます。他に県の障害者指導員があります。

障害者を指導することは、意義があると思っています。教えた人が、上達するとうれしいです。スポーツ講習会が今年より1回あります。これは、市の障害者対象でスポーツを5種類位紹介します。自分も講師をします。連合会でしていることなどを紹介します。

9月5日、15日、19日の3日間、Z町で講習会を「シーホースクラブ」の会が開きます。9時から12時までの予定です。それは、11月に一人熊本大会(全国大会)に出る人のための講習会です。水泳と身体障害者の会が日曜毎にあり忙しいです。

【瀬川さんのインタビューについての分析】

人生にとってそのものが、価値があるかそうでないかの違いは、それがどのようにして

あらわれたかによるだろう。障害を持つ前の瀬川さんにとっては、水泳はあまり親しみのあるスポーツではなかった。しかし、障害を持つことによって、水泳と出会えたのである。これはまさに、『転機としての障害』と言えることができるだろう。人生のライフコース上で人はいくつかの『転機』に出会う。転機にであった時に今までの人生と接続のよい生き方を選び取っていく。

成田真由美氏（アトランタパラリンピックの水泳種目での金メダリスト）は次のように語っている。「障害を持つ前はできなかった水泳を、障害を持ってからできるようになったことを思うと、人間の可能性ってすごいなあって感じます」（藤田[1998:106]）

瀬川さんにとっても、水泳は『障害があつてこそ出会えたもの』として価値を持つ。これは、障害の肯定化に役立つということが言える。

一方では瀬川さんは「障害者スポーツ指導員」をめざしている。これは、障害からの離脱をめざしていると解釈すべきだろうか。「障害者を指導する障害者」として生きていこうという折衷的・妥協的意欲がここにあらわれているということは、言ってもよいように思われる。

水泳クラブの創設に関わったり、今でも会員の加入、施設の充実にも気を使っている彼からは水泳クラブを通して障害者コミュニティを作っていこうとする意気込みも感じることができる。

この事例は「障害」をきっかけに能力を発揮してリーダーになっている有能な人物の例であるとは言えよう。

1999年7月10日

石田憲市さん（仮名）インタビュー

都内の喫茶店にて実施
インタビュアー 檜田美雄（徳島大学）

=プロフィール=

52歳

腎臓透析患者（内部障害）

糖尿病に由来する視力障害（全盲）

妻も身体障害者

生活保護を受けている

白杖会の会員（40歳から）

元フォークリフトの運転手

ガイドヘルパーの介助で水泳大会に参加

水泳クラブには属していない

東京都障害者スポーツ大会に毎年出場

[]は筆者の補注

水泳に関して

水泳は3年前の50歳になってから始めました。水泳の他は散歩をするくらいです。

もともとのスポーツ歴は、中学校から水泳をやっていて、高校1年で中退するまで水泳部でした。競技歴は100メートル自由形、200メートル自由形、それとか個人メドレーあとは学校が主体だから、400メートルリレーとか、メドレーリレーとか。メドレーリレーの時はバタフライをやっていました。自由形じゃなくて。本当は自由形が担当なんだけど、バタフライは他の選手が速くなかったから。そのときの成績は大体神奈川県で一位、関東大会で四位、全国大会では予選で落ちてしまいました。個人メドレーでは四年間負けたことがなかったです。大体クロールができる人は平泳ぎが遅いんですが、自分は平泳ぎもクロールも両方得意なのでよかったです。バタフライとか自由形というのはそんなに差がつかないんです。

障害者スポーツを始めたのは、同じアパート[区の福祉集合住宅]に住んでいる女の子がシンクロナイズドスイミングをしていたので自分も水泳をしようと思ったからです。[再開の]一番初めは、満身に泳げませんでした。全然泳げないから、進めないからビート板を持って、ばた足から始めました。二回目から泳げるようになりました。50メートルはなんとか泳げるようになりましたがやはり若い人が速いです。体力ありますしね。障害者になって、まだバタフライとバックは[大会で]一度も泳いだことがありません。バックは練習しても最初はおかしかったけど、様になってきたから試合に出れるなと思いますが、バタフライは無理と思います。バタフライが一番、体力を使うし、疲れるからです。足を

バタバタさせるのがバタフライじゃないんです。腰から使わなければだめなんです。形ができていないと泳げない。

練習について

日頃は近所の区立体育館で行っています。あそこは障害者はただで入れるんです。大体週1回水曜に行っています。一時間で300～500メートル位泳ぎます。クロールと平泳ぎをしています。歩いていくから、雨がふると行かないんです。歩いていくから疲れちゃうから。貧血がひどくなると歩けなくなっちゃうんです。ぐたーとしてね。

障害について

目が不自由になったのは40歳くらいからです。今、全盲だけど、そのときは0.01あったんです。42歳くらいまで白線が見えるから杖で道路が歩けました。自分の家から障害者会館で歩行訓練をやってくれます。一番初めから一人で歩かされました。先生が後ろについて。道は頭の中ではわかっています。大体状況がわかっています。オートバイが止まっているところは大体決まっています。道路だって「あと一本」とわかります。本数を数えていないとわかりませんが。店の名前は看板に杖があたると、大体わかります。スーパーマーケットがあるなどというのも頭の中に入っているから。時々家の確認をしないガイド[ヘルパー]が来ます。うちがどこかわかんない。そんなん来ても困りますよ。透析病院はわかりますが、「公園の先を左に曲がってくれ」と言っても、公園の手前を左に曲がるので着きません。いい人もいるんだけど。今年は練習量が少なかったんです。貧血が苦しかったから。今年は体調が悪かった。私は透析患者だから、貧血が強いとどうしようもないんです。透析やっていると貧血は一生の付き合いだから。もう治らない病気だから。正常は31[%](注1)なんだけど、今21[%]位しかない。昨日はかって21[%]でした。貧血だから、ちょっとひどいんですよね。透析は火曜日と木曜日と土曜日に行っています。三年前は、市民大会も内部疾患があったんです。内部疾患で出る人が少ないから、なくなったんです。知らないから、初年は、目の障害で大会に出ました。大会では目の障害が速いんです。障害者で透析患者で泳いでるのは、自分くらいですよ。普通は泳ぎませんよ。貧血21[%]もあるのに。医者からは、軽い運動はいい。無理をしなれば大丈夫だって。がんばって無理をしちゃうとだめなんです。

ライバルと仲間たち

ライバルの67歳のKさんに今日は負けてしまったんです。普通だったら、あの人には負けないんだけど。今日は60秒かかってしまったんです。今日は右腕が上がらなかったから、これでは負けてもしかたないなど。今日は調子は確かによくないけれど、負けると思ってなかったんですけれどもね。体調がよければ泳げるはずだから。今日は寝不足でだめだなど思いました。泳ぐ前から参っちゃって。クロールを泳いで。すぐ平泳ぎでした。Kさんとは、大会などで話はするが、日常のお付き合いはないです。

区の盲人会で白杖会という会があるんですよ。そこには65歳以上でないと入れないんだけど、私は40歳くらいから入っている。86歳のおぼさんが入っていて、そのおぼさんが連れて行ってきて40歳だと会員になれないんだけど、「なっちゃえ」って言って会

長が「お婆さんの友達だからいいよ、会員で」ということで10年たちました。会があって、「試合があるので出ないよ」と言うと、白杖会の人が「応援に行く」と言い出して。来ても見えないじゃないですか。「来なくてもいいよ」と言ったんだけど。来なかったけど、そこまで言われちゃうとなんとかしなくちゃしょうがないなと。白杖会は、川柳と民謡と俳句、大正琴、四つ位あるんですよ。川柳と民謡に出ている。聞いてあげるだけです。教えてくれるから。新しく入ってきても、自分が早くから入っているの古株です。

スポーツをする上で気をつけていること

あまり気をつけていることはない。疲れないようにというのが条件なんです。あまり無理はできませんから。25メートル泳ぐと5分くらい休む。その繰り返しです。一時間しか泳がないけれど、正確には50分、最後には、疲れてどうしようもなくなる。手が動かなくなる。水をかけないから、これはどうしようもない。いい時と悪い時がはっきりしている。今日は調子いいとか、すぐわかります。25メートル泳いだら、今日は悪い方です。生活上の工夫もなにもしていない。家の中で、自転車こぎをしている。夏は泳ぎに行かないから。毎年4月から泳ぎ出します。毎年7月まで。今年は8月まで泳ぎます。S区の大会があるから。

水泳のルールについて

盲人は、真っすぐには泳げない。真ん中を泳いでいれば、顔を左に上げると、右に曲がる。左と右を交互にする。今日は25メートル息なしで泳ぎました。去年は飛び込みでおっこちゃいました。浅いから。浅いから頭を打ってしまうんじゃないかと思って。S区の練習場は、飛び込み禁止で練習ができない。練習の時には、下から出るから、大体、感覚でわかる。もうすぐというのは、感覚でわかります。こわくはありません。手を突き指したりすることは、三年間泳いでいて、1回もありません。ゴールは見えていないんだけど指示棒(注2)は使っていません。障害者のコース、右側通行とS区では、ぶつからないようになっている。お婆さんたちは歩いているだけだから、よけてくれるが、子供だと困る。お婆さんだったらあたらよけてくれるが子供はよけてくれない。監視員がいるので、子供に文句を言ってくれる。

家族について

私は50メートルを30秒で泳ぎますが、小学一年生まで一緒に暮らしていた私の息子はもっと速いんですよ。100メートル56秒ですもの。36年か37年前の話だけれど、私たちの時代は1分7秒で優勝できました。その時は100メートル1分きると世界新記録でした。

体調について

先週月曜に病院に行って、水曜に行ったら、血が止まらなかったんです。ここに針を刺すんです。[医師に]泳がない方がいいと言われました。貧血で21[%]でした。

体調が悪いと、眠りにくくて3時に起きちゃって、テレビのイヤホンをつけっぱなしで、寝ようかと思ったら、寝られなくなっちゃってね。今日は寝ないまま来ちゃったよ。

私も迷惑だよ。いつもこんなに「来るのが」嫌と思ったことはなかったです。

食事療法について

水分を一日 750 ml にコントロールしています。水分の制限は大切です。リン・カリは制限がきついです。肉 70 g、魚 80 g。昨日栄養士が来て、肉なら 100 g 食べなさいって言いました。今、貧血が強いからね。自分でやる気にならないと「だめなんです」。「糖尿になって」始めの 4 年間はなにもやらずに、やり放題のことをやっていました。栄養士の指導もあったけれどスイカなどをとっていました。

腹のたつこと

大きな声を出すには、出すだけの理由があるんですよ。「大きな声を出した」とそれだけしか言わないわけです。大きな声を出したら、「あんた大きな声だしらいけないのよ」と言われるんです。

これからの抱負について

50 歳から 60 歳になるまで泳いでみようかと思っています。あと 8 年。その前に負けたらやめてしまおうかと思っています。クロール負けたって平泳ぎがあるから。バタフライはできないけれど、バック泳げれるようになりました。調子良くないと K さんに勝てないからね。去年から負け続けている。今日は負けてもしようがない。原因がなくなりゃ勝てると思うから。25 メートルで息切れしちやったんです。去年と同じ位に泳げたからまあまあじゃないかと思っています

【石田さんのインタビューについての分析】

水泳は石田さんにとってどういう意味を持つものなのだろうか。そこから分析を進めていきたい。インタビューの中より彼を水泳に向かわせる要因については次ぎのことが言えると思われる。

- ① 家族、とりわけ先妻の子供が水泳をやっていること
- ② 昔はかつて水泳の選手であり、誇りの回復に役立つ
- ③ 白杖会という障害者グループのアイドル的存在であり、自分の存在価値を上げる。
- ④ 水泳のライバルを持っており、競技の面白さを実感できる。
- ⑤ 病気で生活保護を受けている自分がすべての自分でないんだという思い。
- ⑥ 妻に対しても他人に対しても闘う姿を見せることで『強い自分』をアピールすることができる。

自分の過去の人生が価値あることを確認するためのよすがとしての障害者スポーツ水泳なのである。未来に向かって自分の現在を作り出すのではなく、過去に向かって自分のありようを一つの物語りとして完結させるために自分の現在をコントロールしようとしているのである。特に中途障害の人にとって比較的重要なことは、現在をコントロールして、より完全なものにするという側面である。

過去にトップスイマーであったとしても、現在、泳いでいなければ意味を持たない。白

杖会においても今、石田さんが泳いでいることによって、石田さんの存在を価値づける理由になっているのだろう。また石田さんは中途障害に関わらず白杖会という盲人コミュニティを持っており、その仲間たちがコンボイ（注3）として存在することにも注目したい。

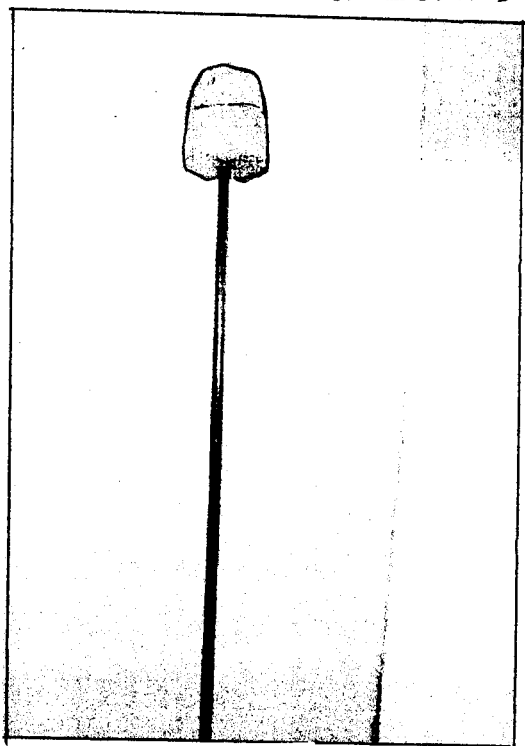
石田さんが盲人スイマーであれば使う指示棒を使わないのは、他の能力をすべて使ってスポーツをやっているという証拠である。これはものすごい集中力を必要とするし、日頃の鍛練が重要である。ターンを教えてくれる人がいなくても、ゴールがわかるためのコーチがいなくてもかかわらず、水泳をしていることを通して、今の人生を水泳にかけているということがわかる。

このインタビューで明らかになったことは、水泳をしている人は、それぞれ 固有の意味づけに基づいて行っているという事実であった。

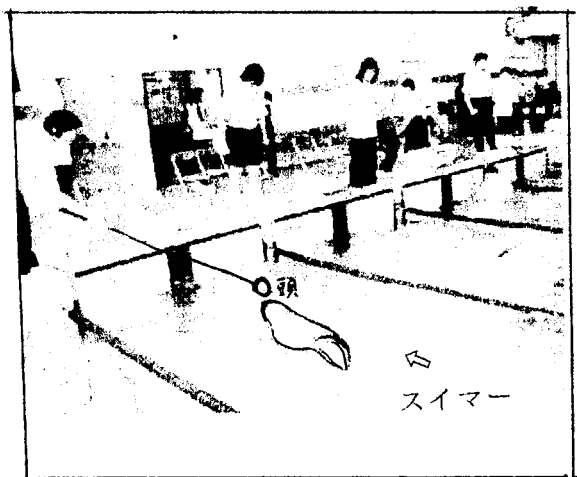
（注1）これはヘマトクリット値の値であり貧血の指標として用いられる。貧血とは、流血中の赤血球数（RBC）、血色素量（Hb）、ヘマトクリット値（Hct）の全部または一部が低下した状態をいい、通常RBC $350 \times (10^4)$ 以下、Hb 10 g/dl 以下、Hct 35% 以下を貧血と言う。

（注2）通常の盲人スイマーは、練習中であってもターン及びゴール前、1メートル位の適当なところで、別添（写真1）のような1、8メートル程度の指示棒と呼ばれる棒で、水路が終点になっていることを教えてもらっているが、石田さんはそのような援助なしに、水路の終点をわかるところでは主張している。このことの意味については分析に詳述した。

（注3）ここで言うコンボイとは「日本人の生き方」（岩波書店 1985）の著者であるD. W. プラースが提唱した『人生を共に歩くみちづれ』の意味である。



指示棒（写真1）



使用例（写真2）

1997年7月10日

岡本和美さん(仮名) インタビュー

都内の喫茶店にて実施
インタビュアー 岡田光弘(筑波大学大学院)
阿部智恵子(徳島大学大学院)

=プロフィール=

50歳

幼少時より脊椎カリエス

38歳時クモ膜下出血発症

実姉と二人暮らし(姉は2歳年上)

67歳(2年前)で実母が死亡

水泳指導員

障害者通所授産施設「H」の指導員(注1)

失語症(注2)

東京都スポーツ大会に出場

[]内は筆者の補注

水泳について

大会などでメダルをもらった時には、すごく感激したし、東京大会の主体下にあったけどなんていうか「全国大会に行けます」って言われた時はすごく感激したんです。でもどんどん[参加]すると、そんなに、たいしたことじゃあなかったんです。

全国大会には一度だけ参加したことがあります。一回行くとその後は行けないんです。

東京都だからすごく競争率が高いんですって。全国大会に言った時にはすごく感激しました。自分が障害があつてこんなのに[いいのかなー]と書いていたんですよね。だけど、いけて言ってくれたら、ちゃんと補助金を出してくれて行けてよかったと思いました。

でももっとなんというかすごい障害が重い人がいっぱいいるということが、すごいなーっと思ってなんていうか、前は涙が[流れて]すごかったの。感激したのじゃなくて、私よりも不幸な人がいっぱいいるんだなーっと思って。東京大会でもいっぱいあるんですけどね。あーっと思って、すごいっと思って。こいうふうに[涙が流れるように]なっちゃうの。みんなで一生懸命やると、すごくわたし[涙が流れて]こうなっちゃうんですとね

もっとねー、なんていうかなー、私なんかまだね、なんていうか、恵まれているんですよね。成田真由美さん(注3) オリンピック[パラリンピックのあやまり]に出た人です。アメリカに行った人なんですけれど、あの人なんか半身四肢の麻痺なんですけれど、すごいんですよ。不幸じゃないけれど、障害を克服しているだけけれど、もっともって[私よりも]重い人ばかりなんですよね。世界中の人達[の中で]でも、優勝したんですよね。すごいなーっと思っています。だから私の先生がね。「あんたもやらないといけない

よ。ダメ！ほらもっとやるの！」って言われるんだけど。ちょっとウフフ。私、もう歳だからね。あんまり無理しちゃいけないなあって[思うんです]。

38歳の時にクモ膜下出血になって「おはよう」も言えなかったんです。口が全然重かったんです。言おうと思っても言葉が出なかったんです。お母さんが、「これじゃあだめだ」と言って、金沢のU病院へ入れてくれたんです。3カ月。そうしたらそこで水泳があったんです。「あーいいな」と思って。そこへ行って、それ終わったら、A町の高校に、水泳を教えてくれるところがあったから、「行きたいなー」って思ったけれども、そんなことは自分ではできない。仕方がないわと思っていたら、「先生に頼んでいけばいいじゃない。」とお母さんが行って、「いいですか」というと「いいですよ」とその先生が行って、あーいいなって思って行ったら、その先生が、障害者のスポーツ指導員の資格があるから、「あなたこっちでいろいろ東京都の大会があるから出てみませんか」と言われて[大会へ]出たら優勝になったんです。

指導について

障害者手帳はいつも持っています。指導員証も入れています。自分はA町で教わった先生にまだ教わっています。この先生も非常勤なんです。指導員の更新は1年毎にしなくてはいけないんです。認定があるんです。今、中級でこれが終わったら、上級にいかうかなと思っています。あーその手帳には上級指導員になっていますけれども、改正があったんです。認定には7日間の講習があったんです。教室に出ても、試合に出ても、講習に出ても、それぞれが実績として加算されるんです。指導員としての講習だから、障害を持っている人も、障害のある人も一緒に講習を受けているということなんです。ゴール・ボールとか陸上も書かれています。私はできませんけれど、役員や審判をしたり、弁当係とかあるんですよ。大阪に行った時は、弁当係だったんです。ゴール・ボールはどのようなものですか。それはもう、なんていうか、すごくはげしいです。目の見えない人は、耳で察してすごい。ロートレースは目の見えない人人と見える人がコンビでリレーをやるんです。指導員の資格を取ったのは、指導員の資格を取っている先生に教わったことも影響しています。

身障者スポーツについて

A町でも[障害者スポーツ]はあんまり優遇されていないですよ。本当はね。[目の]見える人達はいいかもしれないけれど、私たちの身体障害者ということを理解してくれない人ばかりなんですよ。もっともっと、[目の]見える人もみんな、[目の]見えない人もみんな、一緒にやらないといけないと、私は、すごく感じているんですけど、やっぱりまだまだすごいなー[できてない]と思います。今日の大会でも、知恵遅れの人と身体障害者の人の出場する日を分けていましたが、本当は一緒の日をやった方がいいんですよ。本当はね。本当は分けたのは、すごく違うのになー。みんなでやればいいのになー。いろいろあるんだなと思って。オリンピック[パラリンピックのあやまり]が長野でありましたけど。本当はみんなでやらないといけないんだけど、前から知恵遅れの人とそうでない人とは一緒にやらないといけないんだけど、分かっているんですよ。でも少しは、改正になってきたんですよ。今、一番すごく変だと思っていることは、学校が障

害者と普通の人を分けていることなんです。本当は自分は違うなーと思っていたんですけどね。自分はどんどんみんなで作らないといけないと思っているんだけど。やっぱり、不幸の度合いがあるかもしれないけれど、本当には、正常でいても、みんな一緒になきゃいけないのに。私はそれが一番、変だなあと思っています。水泳のクラス分けについてについてですか。そういうものなんだろうという感じですね。同じメンバーで泳いでいます。入れ替わったりはあまりないんです。

何か他のスポーツをしているかということですか？水泳が一番なんというか 一人でやれるんです。テニスだったら二人でないといけないでしょうし、それと〔水泳は〕一番お金がかからないんです。ウフフ。〔他のスポーツ〕はやっぱり、なんというかお金がかかりますね。障害を持ってからは、給料も半分ですしね。

生活歴について

結婚前は幼稚園の先生で、ある大学に入って、助手をしていて、その後、結婚をして専業主婦になったんです。専業主婦は10年間してました。専業主婦の間は奥様の遊び程度の水泳をやっていました。結婚して水泳サークルに入ったんです。水泳は小さい時からちょっとはやっていたんですけど、あんまり運動はしなきゃいけないと言われていて、大学時代は運動をスキーも含めていっぱいするようになりました。S学園に入ってある大学の助手をして、事務職に就いて、先生も大体同じ時期にしてその後、結婚しました。水泳は結婚した後で、水泳のスクールに入って、たまたまやっていたけれども、そこから本格的にやっていて、リハビリの時にもう一回水泳に出会ったんです。

今はT病院に通っているんです。それは、水泳を教えてくれた病院です。温泉もあるし、すごく設備もいいところです。一カ月に一回診察があるんです。言語療法の方は、卒業しているんですけど。字が書けないんです。漢字だったらまだいいけど、こういうひらがなはだめなんです。水泳は障害者の補助をやったり、自分で泳いだり、大体週2回位はプールに入っています。

身体の方は、大変で、左側は熱いとか寒いとかを感じません。だから自分でお茶を入れる時は左はだめなんです。お風呂もこっち〔左側〕から入ったらだめなんです。〔食事の〕後片付けは私の仕事なんだけれど、お姉さんに、「もうすこしちゃんと洗ってくれないとだめ」と言われます。うちのお姉さんも離婚していて私と二人暮らしです。お姉さんには子供が二人いて、私はいません。姉の子供は二人とも、自衛隊に入っています。

家族について

〔両親は〕東京なんですけれど、北海道の夕張で生まれました。その後、うちのお父さんはK建設、そこでずっと働いていました。札幌とか、新潟とか軽井沢とかそういうところに支店があったんです。転勤があったらうちは〔家族が〕みんなついて行くんです。

本当はしたらいけないんですけど、小さい時にはドッジボールをしていました。お母さんに〔だめ〕と言われたけれど、隠れてやっていました。

姉とは二つ違いなんですけど、私がカリエスだったからすごくお姉さんに迷惑をかけたと言われました。「あんたは小さいときたいへんだったんだから。もー」って言われます。私も「いいじゃない。私が好きでなったんじゃないんだから。」と言り返すんです。小さ

い時にはあまり自分を病気とは意識しませんでした。障害者だから、閉じ込めて外へ出さないということは他にはあったようですが、私はお母さんと「なんでもいいからどんどん外へ行っちゃえ」と言う感じで。外へ行ったんですよ。早稲田大学に入った人で乙武さん（注4）もお母さんがすごく大変だったでしょう。そうだなあって思います。私〔のお母さん〕もそうでした。乙武さんのお母さんも乙武さんを一生懸命育てようとすごく大変だったでしょう。私のお母さんも大変でした。私のお母さんもお父さんももう亡くなっています。お母さんも大変だったけれど、お父さんも経済的にちゃんと一生懸命やってくれていました。だから、私は恵まれていたな一って思います。

学校は普通の地域の学校へ行ったんです。いろいろあったんですよ。お母さんが、怒鳴りこんでいたりしてね。私も忘れたこともあるんだけど、その普通の高校はだめだとか言われて。〔こちらは〕そんなことはできませんって言って。いろいろあったんですよ。小学生になる時にも一人の先生が〔障害があるから〕と言って大変だったんだけど、別の一人の人〔先生〕が、「みんなでやれば、できるようになるんだから」と言って入学できたんです。そんなことがあったんですよ。

小学校時代は障害があるからとっていじめられたことは、なかったです。私は楽天的で「なんでもいいわ」と思う方なんです。〔私は〕本当に恵まれていたんですね。いつも〔誰かが〕助けてくれる。内緒でなんだってやってくれる人がいるんです。夕張に生まれて、洞爺湖、札幌、高学年で東京に来たんです。東京と北海道では北海道の方が暮らしやすいですね。でも今は変わっているでしょうね。全然、行ってないけれども。

両親は東京の出身なんです。コルセットをいつも東京に行って、作って帰っていました。今みたいな、義足みたいなんじゃないから、地方ではそんなことはできないと言われて半年に一回くらい〔東京へ〕来ていました。忘れちゃったけれど、すごく大変だったんです。うちはお父さんも大変だったけれど、お母さんは子供をあっちへやったりこっちへやったりすごく大変でした。お母さんは2年前に67歳で亡くなりました。お姉さんと仲がよいかですか？そうでもないけれどね。

私、脊椎カリエスがあったでしょう。だから、そんな差別は受けていたんだけど、知らん顔というか、そんなに重荷じゃなかったんです。みんな主婦でそういうの〔クモ膜下出血〕があったら、もう泣きつづけて、すごくすごく泣くと思うけれど。〔私は〕そうじゃなくて「しょうがないんだ。自分で克服していかなければいけない」と思ったんです。うちのお母さんが2年前に亡くなったんです。〔そのとき〕あーそれじゃあ、もうしょうがないんだから、不幸じゃないんだということを感じたんですね。障害者の水泳が支えにもなりました。障害者の仲間たちといるとみんなリラックスしています。だってみんな同じですから。私がリーダー的存在ですか？私はリーダー的存在ではないです。だっておしゃべりもできないのに。

ニーズセンターH「障害者通所授産施設」

12、3年前にできたんです。前は施設だったんですけど、今は独立して障害者通所授産施設になっています。平成8年社会福祉法人 R福祉会が設立認可され、社会福祉援護施設ニーズセンター「H」が設立されました。60名の利用があり、園芸、陶業、売店営業、喫茶店営業などが主な授産種目です。送り迎えは家の人をしています。

私は月 2 回位行って指導をしています。[障害の] 重い人もいるので大変なこともあります。やっぱり大変なんですね。お金、指導者とか私とか動ける人はちょっとだけですね。

今後について

私はもうね、これをやりたいんです。障害者の補助をいろいろやりたいです。水泳は自分でも続けます。パラリンピックの大阪に行こうかなと思ったけれど、ちょっと補助で行こうかなと思ったけれどお金があまりないから止めます。補助はお金が出ないし、それと私、記録はのびないから。私にはしてくれないので。年齢別みたいのはありますが、東京都だったら 40 歳から。それで分かれています。あんまり年寄りになるとね。

【岡本和美さんのインタビューについての分析】

岡本さんは語りの中で過去、母が自分にしてくれたことなどを話すことにより「今」の自分があるべき姿として物語っている。幸せな過去を語ることにより、今の自分の存在を意味または価値づけているということが言える。人は自分の人生の過去の人生を、そのときそのときの、今にあわせて、強調点を変えながら語るができるのである。[「私は恵まれている」という言葉の多用に注目]

障害を持つこと（マイナス面）が社会化の一面であるとするならば、スポーツができることや、障害者でありながら障害者を指導する立場に身を置くことは、社会化のプラス面としてとらえることができるであろう。

岡本さんは「水泳は他の競技においてお金が一番かからないし、一人ででき、成績の良し悪しで他人に迷惑をかけないでよい」と言っている。そのことから、水泳は他の競技に比べ、独立性の高い競技ととらえることができるであろう。

水泳仲間はたくさんおり、話もしているが、東京都障害者スポーツ大会においても、自分の競技が終われば、仲間を応援することなくすぐ帰るところにも、彼女の独立独立歩という姿を伺うことができると思われる。ここで明らかになったこととしては、障害をそれも幼少の時に持った彼女が姉の保護の下で「健常者としての自分」を保持し、のちに二重障害となった時、自分を改めて、障害者の中でも健常者に近い存在として位置づけ直していたところが重要だと思われる。例えば、障害者からの離脱をはかる手段として「指導員をめざす」という行為が行われていたことがその証拠であると言えよう。

(注 1) ニーズセンター「H」は施設発行のパンフレットによれば重度障害者の社会参加を基本に園芸や陶行等の作業を通して、療育(療法)、生活、自立訓練、健康増進等の指導援助を行い、クラブ、レクリエーション活動、各種行事の中から、社会経験を深め、よりよい処遇と賃金保障により、働く喜びや生きがいを得られることを目的とする。また、施設解放や喫茶、売店の業務を通して、地域住民との交流を深め、社会に開かれた施設運営をめざす。

(注 2) 失語症とはいわゆる痴呆などの知能異常がなく、言語機能に関する筋肉・目・耳

などの運動もしくは感覚の障害も認められず、それにもかかわらず言語機能が優される状態であり、聴取（聴覚が正しく、内容が理解される）、または発語（言葉を作りだし、それに意味を与える）、読字、書字の四つの機能が障害されるものを言う。

(注3) 成田真由美氏 1970年生まれ 障害（頸髄損傷） 種目：水泳
アトランタパラリンピック 100メートル自由形：金メダル
50メートル自由形：金メダル
数々の世界記録も樹立し活躍している。

(注4) 乙武洋匡氏 「五体不満足」の著者 早稲田大学学生

1999年8月11日

松木直幸氏（仮名）インタビュー

X大学資料室にて実施（X県）
インタビュアー 樫田美雄（徳島大学）
阿部智恵子（徳島大学大学院）

=プロフィール=

55歳

Y県出身。結婚してX県へ（X県は妻の実家）

47歳の時工事現場の足場より転落し右半身麻痺の障害者となる。

身体障害者手帳（2種2級）

障害名（右下肢機能障害5級 右上肢機能全廃）

平成9年2月身体障害者水泳クラブ「ラッコクラブ」（仮名）に入会する。

平成9年11月全国身体障害者スポーツ大会に県代表として出場する。

障害について

障害を持ったのは、工事現場の足場から転落してからです。当時私は、大型のプレハブ冷蔵庫増築を請け負っていました。転落したところに、たまたまL字型のアンクル・ピースがあり、左側頭部に突き刺さり陥没骨折し脳に障害を受けて右半身麻痺となりました。

身体障害者スポーツとして、水泳を始めたきっかけは、病院で主治医に勧められて、リハビリの一環として始めました。水中は負荷がかからないからということでした。

水泳について

Y県では、子供の頃から泳いでいました。田舎でしたから川での遊びが主でした。X県に来てからは子供を連れて川へ行ったり海へ行ったりするくらいでした。

「ラッコクラブ」との関わりについては1997年に入会しました。会員同士はそこだけのお付き合いです。クラブ員で一番若い人は九州での大会（注1）に行った視力障害のある人で養護学校の先生をしています。一番年長の方は63～64歳です。会員は20名で、毎週木曜日が練習日です。

夏は一人でM町のプール（50メートル）に練習に行っています。屋外のプールなので2～3回行ったら真っ黒になります。冬はJ町のプールへ行ったりしています。

水泳をしてよかったと思うことは身体が丈夫になったということと、プールではいろいろな人とのふれあいができることです。またいつも発作止めの薬を飲んでいますが。水泳を始める前は2～3回発作を起こしましたが、今は発作も起きなくなりました。

ルールについて

クラス分けに対する不満はあるけれど言ったところでどうなるでしょうか。どれだけ変

わるというのでしょうか。言ったらストレスがたまるだけでは。自分をそれに合わせて行くということが。ジャパン・パラリンピック、全日本は26通り(2)違っています。ルールについては、他にも気になることがあります。

聾の人で平泳ぎをして、両手をつけてターンのところを片手ターンして失格した人がいる。1年前にも言われたが1年たったので忘れてしまった。普段の泳ぎに問題があると思われる。指導に問題があります。気の毒だが失格です。

去年標準記録をこえていたのですが、手違いからかジャパンパラリンピックに出れませんでした。今年はお出れることになっています。標準記録は公開されていなかったんです。今は去年のコピーも、もらっているし。今はいいです。それで大体わかるから。新しい人が入ったら、言ってあげたいと思います。去年、標準記録が大幅に変わったんです。大阪はレベルが高いんです。片麻痺も変わりました。出るはずのないタイムが出る場合があります。ジャパン・パラリンピックは世界に合わせるということで、2、3年前に片麻痺と下半身麻痺のクラスが一緒になりました。ジャパン・パラリンピックに出るクラス分けで、片麻痺だけのクラスであれば、50メートルで、50秒きる程度が普通の記録なんです。下半身が麻痺であるが、両手が動ける人は、クロールもどんでんできるのだから42、3秒のタイムが出る時があるんです。

記録や成績について

記録がすべてじゃないと思います。昨年の中四国大会で、会場でメダルをかけた写真を撮ったのですが、私も去年メダルがなかったんです。初めて行った人なんかでメダルのない人もいるのに、差別になるんじゃないかなーという気もしますね。今年も広島でも写真は撮らなかつたんです。

指導について

水泳連盟のWコーチに教えてもらいました。半身麻痺だから、今までの感覚だと沈んでしまうんです。もがいている感じになってしまうんです。結局一から始めないといけないんです。Wコーチは、左半身だけで泳いでいます。半身だけで泳げない人に、いろいろ言われても、指導されても気持ちの中に入って来ないんです。違うだろうということになるんです。

リハビリについて

根本的にリハビリというのが頭にあるんです。確かに必死ではありました。すぐやめると思っていたかもしれませんが。もともと水泳クラブへ入った動機が違うし。身体障害者スポーツならなおさら行ってメダルをとれるようになれるか心配です。知的・身体両面からのリハビリが大切だと思います。「本音は勝ちたいですよ」

現在の職業について

駐車場の係をしたりすることもあります。普通だと車の入れ替えをしないといけないのだが、自分ではできませんね。改造車でないと乗れないんです。字も書けないし、運転もできません。なんべんも職業安定所にいったんですけど適当な仕事はないですね。

身体障害者コーナーに行っても見つからないですね。働きたいですね。

水泳以外の趣味について

けがをする前は昔はテニスをしていました。(テニスクラブを結成していた) 童話の会に入っています。

共同参画で「森のエッセイ」を書くこともあります。はばたきコーナーにも投稿します。Z Z新聞の夕刊の「ちょっとええ話の会」のコーナーにも投稿しています。掲載されたこともあります。

障害者スポーツの初級指導員の資格を持っています。去年とりました。吹き矢、フリスビーなどです。水泳はなかなかとれないですねー。

家族について

水泳をすることについては、家族は何にも言わないです。子供は練習場まで車で送ってくれることもあります。特に、会場内で応援することはありません。

障害後の身体について思うこと

障害後は内臓関係がダメージを受けましたねー。脳はもちろんですが。十二指腸潰瘍、胆嚢炎(胆石)で取ってしまったんです。胆道が少し残っています。今はもうあきらめています。

今後の夢

今のまま、続けて行って、身体をいかに持っていくか、もっと自由に動けるようになればいいんですけど。公共施設では、健常者の人と泳いでいます。私が泳いでいるのを見て「最初、変わった泳ぎをしているなと思った」とか「なんで、片方だけで泳いでいるのかと思った」「息継ぎの練習をしているのかと思った」とかあとで言ってくれる人もいます。そりゃ、見ていておかしいですよ。でもそんなもんは無視しています。盲人の方でロープの境など関係なくメチャクチャ泳いでいる人もいますが、「まあ、しょうがないか」と思います。健常者と泳ぐことは別になんとも思っていないです。健常者とともに、こだわりなく泳ぐことが大事と思っています。

【松木さんのインタビュー についての分析】

松木さんのインタビューは、障害者スポーツの原点を考える上で役に立つであろう。

障害後のリハビリテーションの一環として水泳を始め、最初はプールへの出入りもできにくかったが 今や、大きい大会にまで、出場できるまでになっている。彼の水泳における成長ぶりには 目をみはるものがある。持ち前のがんばりと地道な努力が実を結んだ結果だと言えよう。松木さんは次のように言う。「記録がすべてじゃない」「障害者水泳は勝ち負けを気にしている人ばかりじゃあない」「もっと楽しんでもいいのでは」と。

「リハビリテーションが大切」という発言の裏には、健常者としての自分を意識化したいという願望があると思われる。そしてそれは、知らず知らずのうちに、人を競技性へと駆

り立てるようになっていくのかもしれない。障害者水泳を続ける中で「勝てる自分」を発見してしまった松木さんにとって「もっと障害者スポーツは楽しむべきものであるはずだ」という思いと、より高い競技性の中で「がんばろう」という二つの相反する思いが交差していることに注目すべきであろう。

スポーツという競争社会で、個人としては「記録がすべてではない」と言いながら、もう一方で負けずぎらいの松木さんがいて、記録がすべてでないとわかりつつも、競争社会に参加するということもありうるだろう。これは「本音は勝ちたい」という本稿中の言葉からも読み取ることができるだろう。

それと競争とか勝ち負けということに鋭敏な感情というものを持った自分というものをそこにいる人に投影してその果てに出てきた感想が「差別である」という感情表現なのである。

松木さんは水泳の他にもたくさん の趣味がある。エッセイを書いたり、童話の会にも入っている。これは、身体面だけでなく、精神面の充実を図りたいという松木さんのバランスのよい生き方なのだろう。

(注 1) この大会は第 10 回九州身体障害者水泳選手権大会を指す。

(注 2) 競技団体であるところの日本身体障害者水泳連盟の選手権大会のクラス分けが採用されているところの地域連盟等主催大会の分類としての 26 通りのことである。ちなみに現在日本で行われている身体障害者水泳大会には 3 通りのクラス分けが存在しそのうちの一つは、ジャパン・パラリンピックの区分、そしてもう一つは、全国身体障害者スポーツ大会における水泳競技での区分であり、そして、最後がここで紹介されている区分である。

1999年8月22日・2000年1月24日

花野友彦氏（仮名）インタビュー

Nドーム（大阪）、Y市内事務所（X県）にて実施
インタビュアー 阿部智恵子（徳島大学大学院）

=プロフィール=

59歳

手に障害がある（高校の時の事故がもとで手首の関節より先の欠損がある）

X県出身

Y市水泳クラブに入っている。

53歳より水泳を再開した。（30数年のブランクを経て）

地方公務員で昨年退職した。現在も地方公務員（非常勤特別職、研修の方を担当している）である。

ジャパン・パラリンピック及び日本身体障害者水泳選手権大会に毎年参加している。

[] の中は筆者の補注

水泳を始めた動機について

私の友人の奥さんがY市身体障害者水泳クラブの会長をしていて、会員が少なかつたんです。それで「花野さん、ぜひ入ってください」と言われて、半年位たっただけで入ったのがやみつきですね。平成5年の2月の22日でした。あしかけ7年になりますね。

水泳について

私が、障害を持ったのは、高校2年生の時です。それまでも、泳ぐのは好きなスポーツでしたが〔障害を持ってからは〕ほとんど泳いでいなかったんです。30数年は泳いでなかったんです。水の中に、身体をつけるというのは、なんとも心地がいいんですね。それと、むかしとったきねづかかスイスイと泳ぐことができたんです。

初めて、平成5年の5月に記録会のようなプレ大会がありました。平成5年の11月に全国身体障害者スポーツ大会をX県でやりました。N市をメイン会場として、水泳は、S町でありました。そのプレ大会を5月にやったんです。2月に始めて5月に泳いで当時の全国身体障害者スポーツ大会の50メートル自由形の最高記録を上回りました。私は、随分記録を上回ったんです。それで面白くなったんです。いろいろ情報を集めてみると、広島でやったり、大阪で近畿大会、日本身体障害者水泳選手権大会、ジャパン・パラリンピック大会などが開催されていました。平成5年にこれら大会に出て、そのすべてで金メダルをいただきました。

今はメダルを集めるのが、趣味になりました。今は〔メダルが〕金、銀、銅あわせて40個ありますね。しかし、だんだんとメダルもとりにくくなりましてね。全体のレベルが上がってきて、選手層も厚くなってきたんですね。

私は、70歳まで選手として泳いでやろうと思っています。選手として泳ぐのは[ただ泳ぐのと違い]記録を取るの、練習しなくちゃなりません。特にこのような大会は、高いレベルなので。標準記録を達成しなくてはなりません。50メートルは長いですよ。

70歳まで選手として出たいのです。

記録は、今の年齢で下がりぎみです。水泳を始めた時が最高でした。平成5年に53歳から始めました。

今と昔の泳ぎ方は違ってきています。例えば、昔は平泳ぎは、足が主な推進力でした。今は、足の推進力60%手の推進力40%と計算されており手のかきかたが昔と随分違うんです。昔は両足で水をはさんでいましたが、今は足の裏で水を蹴って、推進力を得ます。泳ぎ方が随分進化しました。その方が、速く泳げます。クロールにしても昔は手を水車のように回していました。今は手をSの字を描くように動かしています。どうしてかという、水の中でこぐ距離が長いんです。それだけ推進力が出ます。

一つの目標を持つと、出場するために、生活を節制するようになります。深酒をやめるとか。私は[宴会等]の二次会はほとんど行きませんね。一つの目的を持って、[試合に]出たいから、生活を節制します。よい記録が出るというよりも、自分の生活が改まるでしょう。食べ物には極力注意をして食べています。

ジャパンパラリンピックの見学者は多いかということですか？見学者はいつもそんなに多くはないようです。主に選手、家族、関係者、ボランティアなどです。PRもあまりしていないようです。

指導ということについて

以前、私も同じクラブの中で、指導をしていたことがあります。上手になってもらおうと、練習計画まで作ってしていましたがこんなことをしていたら自分の練習がおろそかになると思って止めました。申し訳ないけれど、今は、自分のことでせいいっぱいなので。

これからの水泳との関わりについて

水泳を自分の生きがいとして、また『最大の友人』として付き合っていこうと思っています。水泳で得たものは多いです。人とのつながりもできたし、自分の生きがいでもあります。各地の大会に出ることで、旅行をする楽しみもできました。大会で「花野さん、待っていたよ」と声をかけてくれるのもうれしい。

ライバルについて

私は目標とする選手はいません。自分本位の『マイペース』です。人を相手にするという事に目標を置いていません。人を相手にどうこうする歳でもありません。マイペースで生活すべてをよい方に向けていきます。

家族について

妻とはたいてい一緒に旅行しています。平成7年頃より、県外大会へ妻と一緒に旅行をかねて行っています。妻も家事から解放されてきげんがいいので。

【花野さんのインタビューについての分析】

人は自分の人生を価値づけたり、意味づける手段として、人生の中の目的、目標を語ることができると言えよう。

「メダルを集めること」という競技志向の目標は彼のこれまでの人生同様、自分を励起する目標になっている。ここからわかることは、花野さんにとっての人生はこれまで一貫したものであり、水泳もその例外ではないということである。その一方で花野さんは「水泳を楽しみたい」、「マイペースでいきたい」という発言もしている。この点はどう理解したらよいだろうか。花野さんの存在価値の主要部分が有能な公務員であることによってすでに十分支えられていると考えられることが参考になるだろう。彼は自分の存在価値を従的に補充する手段として水泳を用いるのだ。そう考えるならば、それをなるべく長く活用しようという余裕ある姿勢が理解できるようになるのではないだろうか。「70歳まで選手で」という発言も、一方的に競技志向の観点から考えるよりは、生活の伴走者としての水泳という観点からも考えられてよいだろう。しかし、彼のような「幸せな」「余裕ある」障害者スポーツ（水泳）との関わりが、他の誰にも可能であるかどうかという点はよく考える必要がある点であろう。障害者でなくなる（障害者らしくない障害者になる）ために、障害者スポーツに熱情を傾けるといふパラドックスから離脱する条件及び資源はまれにしか獲得できないものであるように思われる。

参考文献

- 藤田紀昭 1998 『ディサビリティ・スポーツ — ぼくたちの挑戦 — 』, 東林出版社。
- 池田勝・守能信次編 1998 『スポーツの社会学』, 杏林書院。
- 石川准 1992 『アイデンティティ・ゲーム — 存在証明の社会学 — 』, 新評論。
- 石川准 1999 『障害学への招待』, 赤石書店。
- 日本身体障害者スポーツ協会 1990 『身体障害者スポーツにおける障害クラス分けに関する調査研究報告書』, 日本身体障害者スポーツ協会 (徳島大学総合科学部 榎田研究室所蔵)。
- 日本身体障害者スポーツ協会&日本身体障害者水泳連盟 1991 『身体障害者水泳競技(調査研究報告書)』, 日本身体障害者スポーツ協会 (徳島大学総合科学部榎田研究室所蔵)。
- Plath, David 1980 *Long Engagement: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press. =1985 井上 俊・杉野目康子訳 『日本人の生き方』, 岩波書店。
- 総理府編 1998 『障害者白書』, 大蔵省印刷局。
- 橘敏也他 1989 『全科 疾患ブック』, 株式会社ミクス。